

## 特集 宗教改革の伝播とトランス・ナショナルな衝撃

### — 宗教改革五〇〇周年にむけて ⊠

## 序

## 加藤 喜之

本特集は、二〇一五年六月二〇日(土)一四時より、立教大学池袋キャンパス一二号館にて開催された文学部公開シンポジウム「宗教改革の伝播とトランス・ナショナルな衝撃—宗教改革五〇〇周年にむけて」(主催:キリスト教神学研究科、後援:立教SEIR「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」)をもとにしたものである。報告者による論考に先立ち、本シンポジウムの意図するところを記しておきたい。

近年、マルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)によって着手された宗教改革の五〇〇周年を記念して、世界各地で様々な講演会やシンポジウムが行われている。世界的には Refo500 (<http://www.refo500.nl/en/news/6>) という団体が発足しており、一二〇を超える大

学や研究機関とパートナーシップを結んでいる。ドイツ、アメリカ、イギリスなどを中心にシンポジウムが企画されており、さらにゲッティンゲンのファンデンヘック・ルブレヒト社から叢書(Refo500 Academic Studies)が刊行中である。他方で、本特集の踊論文が明らかにするように、本邦においても宗教改革研究は盛んであり、多くの重要な業績が積み上げられてきた。特に近年の研究動向については、二〇〇九年のカルヴァン生誕五〇〇年を記念して教文館から刊行された『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』の「はしがき」で、編者の森田安一が詳述している。このような文脈のなかで本シンポジウムは、一六・一七世紀における宗派化(confessionalization)の研究や独創的な視点から叙述された通史の出版などによって、世界的に注目

されているプリンストン神学大学院のケネス・アッポルド教授の来日を契機として、博士と日本の研究者の「遭遇」*encounter* のなかで生まれたものである。具体的には、音楽、国家論、終末論、そして哲学といったテーマから宗教改革という歴史的な現象のトランス・ナショナルなインパクトを浮かび上がらせることを目的とした。

ケネス・アッポルド博士は、キリスト教学研究科の西原廉太教授を受入れ教員とする二〇一五年度立教大学国際学術交流招聘研究員である。博士は、一九六五年、ドイツのケルンに生まれた。一九九四年には、イエール大学で神学者ジョージ・リンドベック教授の指導のもと、博士課程を修了した。学位請求論文は一七世紀ルター派の神学者アブラハム・カローフ (Abraham Calov, 1612-1686) の召命概念を分析したものであり、一九九八年にテュービンゲンのモール・ジーベック社より刊行されている (Abraham Calov's Doctrines of Vocatio in His Systematic Context [Beiträge zur Historischen Theologie, vol.103])。二〇〇一年にはハレ・ウィッテンベルク大学へ教授資格論文を提出しており、二〇〇四年に再びモール・ジーベック社より刊行されている (Orthodoxie als Konsensbildung: Das Theologische Disputationswesen an der Universität Wittenberg zwischen 1570 und 1710 [Beiträge zur

Historischen Theologie, vol.127)。マインツ大学やストラスブールにあるエキュメニカル研究所 (Institute for Ecumenical Research) に勤務したのち、二〇〇七年から米国ニュージャージー州のプリンストン神学大学院において、ジェームス・ヘイスティングス・ニコールズ宗教学史准教授、そして二〇一三年からは教授に就任している。研究対象は、おもに一六・一七世紀のルター派正統主義の形成とその文化、社会、神学的な文脈である。近年ではルター派と農民との関係に着目しており、その成果の一部は二〇一一年に刊行された宗教改革史の概論に反映された (The Reformation: A Brief History [Oxford: Wiley-Blackwell])。本書の邦訳が教文館から二〇一二年に『宗教改革小史』(徳善義和訳)として出版されたのは特筆に値する。

本シンポジウムは、「遭遇」*encounter* というモチーフを通じて、宗教改革のグローバルな展開に言及したアッポルド博士の基調講演で幕を開けた。続いて四人の登壇者が、イングランド、スカンディナヴィア、ドイツ、ネーデルランドにおける宗教改革の受容と展開についての報告を行った。第一発表は、近世イングランドの文化史を専門とする那須敬 (国際基督教大学) による「不協和音：一七世紀前半におけるイングランド国教会と音楽」(Discord in

the Air: Music and the Church of England in the Early Seventeenth Century)」、第二発表は、「近世スウェーデン史を専門とする古谷大輔(大阪大学)による「宗教改革と礫岩国家・スカンディナヴィアからみた王朝的結合と宗派体制化」(The Reformation and Conglomerate State: The Scandinavian Perspective on the Dynastic Unification and Confessionalization)」、第三発表は、「宗教改革期の再洗礼派を専門とする早川朝子(東都医療大学)による「再洗礼派と終末論:アウグスブルクの一般信徒の場合」(Eschatology among the Anabaptists in Augsburg)」、そして第四発表は、「一七世紀オランダ思想史を専門とする加藤喜之(東京基督教大学)による「カルヴァン主義的デカルト派? : オランダ改革派教会と新科学の受容」(Calvinistic Cartesian?: The Dutch Reformed Religion and the Reception of the New Science)」である。

これらの個別発表に加えて、コメンテーターの踊共二(武蔵大学)によって、全体の総括をふまえつつ、日本における宗教改革研究の歴史が明らかにされた。ちなみに本シンポジウムは発表・質疑応答ともに英語で行われたにも関わらず、フロアを含めて非常に活発な議論を行うことができ、嬉しきでもあった。

以下二本の論考からなる。第一論考は、アッポルド

博士による「宗教改革のグローバルな理解にむけて」(Understanding Reformation Globally)」、第二論考は踊共二(武蔵大学人文学部教授)による「日本の宗教改革史研究:過去・現在・未来」である。これらの論考は本シンポジウムにおけるアッポルド教授の基調講演ならびに踊の総括・報告を翻訳して加筆・修正したものとなっている。博士の論文の翻訳を担当したのは、中世後期・近世ドイツの都市史・医療社会史を専門とする井上周平(ドイツ・ボン大学)である。井上氏に感謝するとともに、翻訳許可をいただいた恩師アッポルド博士にも御礼を申し上げたい。なお本シンポジウムの企画・立案、さらには本特集に惜しみない尽力をいただいた小澤実氏(立教大学文学部准教授)に心から感謝したい。

(東京基督教大学神学部助教)